
DOG DAYS×Fate

閣下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS×Fate

【Nコード】

N7721T

【作者名】

閣下

【あらすじ】

外交手段としての戦争が、死傷者の出ないスポーツ的な興業として行われている異世界、フロニヤルド。

そこに遠坂凜の実験に巻き込まれた衛宮士郎が迷い込む。

この話に出てくる士郎は基本、映画版UBWルート後の士郎です。遠坂とは付き合っていないません。

DOG DAYSの原作が^{アニメ}始まる六年前に現れ、年齢も遠坂のウ

ツカリのせいで十歳の状態でしたが、物語が始まるのは勇者召喚の前日です。

第一話（前書き）

なんとなくDOG DAYSの世界に士郎を突っ込んでみたいと思いい、衝動的に書きました。

あと原作をやったのが随分前なのでいくつかおかしい点があるかもしれません。

それではどうぞ。

第一話

side 三人称

ガレット獅子団領にある城に一人の男性が呼び出されていた。

「閣下、彼が到着しました」

紫色の髪をした侍従の一人がそう言うと、閣下と呼ばれた女性は
領き人払いを済ませて、扉の外で待つ男性に声をかける。

「入れ」

そう言われて中に入ってきた男性は、赤みがかった髪をした身長
170cmくらいの赤い外套を着た人物だった。

「今回はどのような用件でしょうか？閣下」

男性は片膝を地面につきながら口を開いた。

「士郎・・・人払いは済ませているのじゃからいつも通りでよい・・・」

その言葉を聞いて士郎は膝を地面から離し、立ち上がり口を開いた。

「仰せの通りに閣下・・・で、今日はどんな用件だレオ？」

閣下・レオと呼ばれた女性の本名は、レオンミシエリ・ガレット・

デ・ロワ。ここガレット獅子団領の領主である。

士郎の問いにレオは一瞬、表情を曇らせたがすぐに取り繕い答えた。

「此度のビスコッティとの戦に参加して欲しいのじゃ」

しかし士郎はレオの表情の一瞬の変化を見逃さなかった。

「・・・何かあったのか？」

士郎は過去何度かレオが戦に参加するように頼まれた事があり、その時は二つ返事で了承していたが、今回は違った。

最近のレオは何かを焦っている。そしてなにより雰囲気がいつもと違うからだ。

その後数分、士郎とレオは目を逸らすことなく顔を合わせ続けるが先にレオが折れた。

「・・・やはり士郎には隠せんか・・・」

レオがそういった後、その口から告げられた事実は士郎を驚愕させるに充分だった。

「・・・というわけじゃ」

「だから、戦の最中になにがあっても大丈夫なように俺か・・・分かった引き受ける」

士郎は2キロ先の人物の表情が分かるくらい視力がいい。それに弓での狙撃も出来る。だから遠距離からでも彼女を守ることが出来る。

と、ここで士郎は戦の日を聞くとレオは、

「・・・明日じゃ」

と言い、瞬間この場に沈黙が舞い降り、士郎はレオに視線を送り続けると、レオの顔がどんどん紅潮していき爆発した。

「今日はもうよい！明日は遅れずに来るんじゃぞ！！」

レオはそう言って士郎を部屋から追い出そうとするが、士郎が出る寸前に振り返り、

「レオ。あんまり一人で背負うなよ？ここにはガウルにゴドウィン、バナードやビオレが居るし、当然俺も居るからな」

そう笑顔を向けながら言って出て行った。

それから数分してビオレが部屋の中へと入ってくると、レオの様子を見て、

「どうかしたんですか閣下？」

と、聞いたがレオは何でもないと告げ、最後に士郎めと呟いていた。その後レオは何かを思い出したようにビオレに聞いた。

「そういえば士郎が来て六年だったか？」

「士郎様が来てからですか・・・うん・・・そうですね確かあと
一か月くらいで六年では？」

「なつかしいのう・・・」

レオの弦きにビオレがそうですねと返した。



六年前・・・

レオとビスコッティ共和国の姫であるミルヒオーレが遊んでいる
ところにサイズの合っていない赤い外套を着た赤っぱい髪をした少
年が現れた。

当然護衛に就いていた騎士はそれぞれ武器を構え、少年へと向けた。

「貴様、何者だ!？」

しかし少年は答えずにレオとミルヒの向こう側にある森へと視線を向け呟いた。

「何か来る・・・」

瞬間、森から咆哮が聞こえ、体長三メートルくらいの犬の様な生き物が現れた。現れた魔物は騎士数人がかりでかかれれば倒せる程度のものだったが、騎士たちは姫二人から離れており叫ぶことしか出来なかった。

「なっ!?! 魔物だとッ!」 「姫様お逃げください!」

などと騎士が声をあげ、レオとミルヒの近くにいたメイドたちが二人を連れて逃げようとするが、魔物の方が早かった。

レオとミルヒ、メイドたちが逃げようとした方向にいつの間にか移動しており、騎士も動くことが出来なかった。

「ガールルルル・・・ガッ!？」

しかし一人だけ反応した人物がいた・・・あの赤い外套を着た少年だ。

その少年は体に不釣り合いな大きさの双剣で魔物を斬りつけ、い

つの間にか姫二人とメイドたちを庇うように立ち塞がっていた。

そして呟く。

「体が縮んでる・・・遠坂のウツカリか・・・」

少年はため息を吐きながら武器を捨てた。

「「「なッ!?!」」」

その行動には全員が驚いた。

そして当然魔物が襲いかかってくる。

「ガアッ!!!」

そこに居た者たちは全員がその少年が魔物に喰われるのを想像した。

しかし次の瞬間に少年は手に弓と剣を持ち、弓に剣を矢の様に番えて紡ぐ。

「————I am the bone of my sword.
《我が骨子は捻じれ狂う》」

その言葉と共に番えられていた剣はどんどんと捻じれていき、矢の様になり、それを放った。

「————偽・螺旋剣!!!」
カラドボルグ

瞬間、赤い閃光が走り、それを魔物を貫いた。

その一撃で魔物は力尽きたらしく胴体に大きな穴をあけたまま力尽きた。

少年はそれを確認してから双剣と同じ様に弓も捨てた。捨てられた弓を見ているとその弓はガラスが碎ける様にして消失した。

そして少年は後ろで呆然としているレオたちに向かって、

「先程の質問の答えですが、衛宮士郎と言います。何者かと聞かれたら・・・」

士郎と自己紹介した少年は少し考えた後に笑顔を浮かべながら、

「正義の味方を目指してる者・・・かな」

と言った。



「ほんに懐かしいのう・・・」

「そうですね・・・そういえば今、改めて思ったんですが士郎様のあの術ってなんなんでしょう？紋章術とも違いますし・・・」

「ワシも詳しい事は分らん・・・あやつも詳しい事は話してくれんからのう・・・じゃが一つだけ分かることがある」

レオの言葉にビオレは首を傾げる。

それを見たレオは自信満々に言った。

「士郎はワシらの正義の味方じゃ／＼／」

顔を赤らめながら・・・

それを見たビオレは、

「命短し、恋せよ乙女。ですねレオ様♪」

「なッ！？何を言っておるのじゃ！！それにお主もじゃろうビオレ！！」

そこに居たのは一人の正義の味方に恋した乙女が二人だった。

第一話（後書き）

レオとジオレが一番好きなので士郎をガレット獅子団領に突っ込みました。

さて、あと数人サブヒロインに入れようと思っているのですが誰がいいですかね・・・

第二話（前書き）

更新です。

第二話

side 三人称

少女は石段を駆け登り祭壇を目指していた。

勇者召喚・・・負け戦続きのビスコッティの流れを変えるために切った少女たちの切り札。

そして駆け登り終わる寸前、祭壇に流星が落ちた。

「あゝ・・・いたた・・・」

現れたのは鏡を通して見ていたあの少年・・・そして少年は少女の・・・少女たちの勇者様。

「はじめまして。召喚に答えて下さった勇者様でいらっしゃいますね？」

「勇者・・・？」

「私、勇者様を召喚させていただいた、ここビスコッティ共和国フィアンノ領の領主をつとめさせていただいております、ミルヒオーレ・フィアンノ・ビスコッティと申します。

少女・・・ミルヒオーレが自己紹介をすると、勇者召喚された少年も自分の名前を言う。

「あ、はい・・・シンク・イズミです」

「勇者シンク様ですよね。存じ上げております」

少年はミルヒオーレの「存じ上げている」という言葉に疑問を持ち質問しようとしたら、自分をここに呼んだであろう犬が現れミルヒオーレの側へと駆けていき、ミルヒオーレのねでなでをいただいていた。

そしてシンクへと事情の説明をしようとした瞬間、火花が上がった。

「いけないっ！もう、始まっちゃてる！！」

「始まってる・・・？」

「我がビスコッティは今、隣と戦をしています。そして勇者様にもその戦に参加していただきたいのです」



ミルヒオーレが勇者に戦の説明をし、見送りを終え戦場を一望で
きる塔へと行くと、

「姫様!!」

ビスコッティ国立研究院の首席研究士のリコッタ・エルマール
待っており、ミルヒオーレに気付いた瞬間、マイクを両手に持って
近付いてきた。

「リコ! ただいまです」

「お帰りなさい! 姫様。勇者様は来てくれたんでありますね!」

ミルヒオーレはそれに答えてから、姿を見せるために一歩前に出
て告げた。

「ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん、お待ちせし
ました。近頃敗戦続きの我らがビスコッティですが、そんな残念展
開も今日限りでお終いです!」

「ビスコッティに希望と勝利をもたらしてくれる、素敵な勇者様が
来てくださいましたから」

そして、勇者様の映像が映し出される。

「華麗に鮮烈に戦場にご登場いただきましょう!!」



「姫様にお呼びいただいた、勇者シンクただいま見参！」

そう名乗りを上げた後に、進撃を始めた勇者はビスコッティが不利だった戦場の雰囲気を一変させる活躍をしていた頃、ガレット側では、

レオンミシエリと士郎、ゴドウィンはその様子をみながら会話していた。

「これはまたあ、やるもんですねあ！」

「そうですね。この年で出来るということは才能ももちろん、何かやっていたんでしょう」

士郎とゴドウィンはシンクの活躍を見て賞賛の言葉を贈る。

が、レオンミシェリは己の獲物である斧を地面から引き抜き、

「ふん、面白い。どれ、ひとつ試してみるかのう・・・士郎行くぞ」

そう言ってレオンミシェリの愛騎であるセルクルのドーマに跨り、呼ばれた士郎もセルクルに跨った。

「ゴドウィン。暫く指揮を任せるぞ」

そう言って、レオンミシェリと士郎は戦場へと向かった。



「勇者キッークッ!!」

その言葉と共に紋章剣を放ち油断していたエクレールに飛び掛かったガレットの兵士を、シンクが蹴り飛ばしけものだまにしてからエクレールと向き合う。

「おっす！勇者として呼んでもらいましたシンク・イズミです」

「うっ・・・エクレール・・・騎士団の親衛隊長」

エクレールが自己紹介すると、シンクは詰め寄って先程の紋章剣について聞き教えてくれる様に頼んだがエクレールは渋る。

しかしミルヒオーレからエクレールに紋章術について教わるように言われたことを伝えると、エクレールは顔を赤らめながら説明を始めた。

「まずは自分の紋章を発動させる」

「紋章発動、レベル1」

二人の拳に紋章が現れる。

「全身の力と気合を込めて、紋章を強化！——レベル2」

背後にも紋章が現れ、そして・・・

「「レベル3！！」」

背後の紋章の形が変わり、

「フロニャ力を気力に変えて自分の武器から撃ち放つ！」

二人はそれぞれの武器を構え、

「それが紋章砲!!」

放った。

赤色と緑色の閃光が二人に向かっていったガレットの兵士たちを飲み込む。

「」「」「うわあああつああ」「」「」

そしてそこに残ったのは大量のけものだまと、肩で息をしているシンクとエクレール。

するとエクレールはシンクに背中を向けて口を開いた。

「紋章砲は便利だが、防具や甲冑を許された戦士長や騎士には防がれることがある。それになにより・・・」

エクレールの言葉にシンクが賛同するように言った。

「撃つと、結構疲れるね・・・」

「よく考えて使え」

「ありがとうございます。がんばります!」

エクレールがシンクの方に振り向いた瞬間、エクレールの視界にシンクに放たれた二本の刀身が黒く柄が短い細剣が映った。

それを視認した瞬間にシンクの目の前に滑り込み、最初の剣を弾き、二本目もその調子で弾こうとしたが、弾かれたのはエクレールで、それにシンクが巻き込まれ吹き飛ばされた。

エクレールを弾いたのがただの投擲技術であることと、その剣がシンクへの直撃コースでなかったのを知るのはあとの事である。

「ほんのちびつと期待して来たが、所詮は犬姫の手下か・・・」

そこに現れたのはセルクルに跨り斧を持ったレオンミシエリと、エクレールを吹き飛ばした剣・・・黒鍵を指の間に挟んで、いつもの赤い外套を着ている士郎の二人だった。

それに気付いたエクレールは声をあげた。

「レオンミシエリ姫に衛宮士郎！！」

姫という単語と士郎の姿を見たシンクが反応する。

「姫様・・・あっちの？それにあの男の人・・・耳も尻尾も無い」

そして姫という単語に反応するのがもう一人。

「チッチ。姫などと気安う呼んでもらっては困るのう」

レオンミシエリ本人である。

「我が名はレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領の王にして百獣王の騎士」

そして吠えた。

「閣下と呼ばんか！この無礼者が！！」

そしてそのノリのまま士郎の紹介も始めるレオンミシエリ。

「そしてこやつは衛宮士郎。お主と同じ異世界人じゃ」

それに合わせて士郎も頭を下げると実況の声が聞こえてきた。

『来たあー！！ついに来ましたあー！！！』

『百獣王の騎士レオンミシエリ閣下に、最強の弓兵衛宮士郎、戦場到着！閣下の愛騎ドーマも相変わらず凛々しい』

「ハハハハッ。それはさておき、ワシと士郎は先に進ませてもらう」

レオンミシエリはそう告げた後に士郎に目配せしビスコッティ側の陣地へと士郎と共にセルクルを走らせた。

side out

第二話（後書き）

メインヒロインはレオ閣下、サブにガレット側からビオレとルージユ、ビスコッティ側からユキカゼで行きたいと思います。

報告

大学の方がすごく忙しくなってきたため、小説を書く暇があまりなく、これ以上の更新が難しい状況になってきましたので、誠にかつてながら、連載をやめさせていただこうと思います。

本当に申し訳ございません。

以下文字稼ぎ・
・
・

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7721t/>

DOG DAYS×Fate

2011年11月17日18時58分発行